

ユートピア 対 ディストピア —ジョンの自殺の意味するもの—

三浦 良邦

Aldous Huxley の *Brave New World* (1932) [以下 *BNW* と略記] の独特の魅力の一つは、不思議なことであるが、相反する二極のユートピアとディストピアという評価が並存していることである。Keith M. May は *BNW* を “satirical utopian (or ‘dystopian’) science-fiction” (99) と両方の定義を用いながら、一方では *BNW* で描かれているくすばらしい新世界>という社会 [以下小説の題名と区別して the bnw と略記] は、戦争、貧困、病気がなく、個人的・社会的対立もほとんど存在しない、人類の希望が達成された社会である、と述べている (108)。Jerome Meckier は “*BNW* is not utopia but distopia” (178) と評している。¹ また、Peter Bowering は、the bnw を “a scientific dictatorship in which the last traces of individuality have been ruthlessly stamped out” (98) とそのディストピア性を強調している。更には、Robert S. Baker は、*BNW* を “one of the major instances of modern dystopian fiction” (6) と述べながら、他方では “*BNW* has assumed the status of a classical utopian novel” (16) と述べ、また the bnw を “a dystopia masking as a utopian paradise” (113) と評している。

ユートピアの定義は、Sir Thomas More の *Utopia* (1516) 以来のユートピア文学の伝統に則って、<どこにもない、よい場所>の意味であり、ディストピアは<どこにもない、わるい場所>の意味であるが、なぜ *BNW* はユートピアとディストピアという両極端の評価を持つのだろうか。ユートピアかディストピアかという二者択一は、読み手の「このような所に住みたい」、あるいは「これは人間的価値が欠如した社会だ」などという恣意的な主観により決定されるのか。それとも、ユートピアかディストピアかの基準は小説に内包されており、自立的に決定されるのか。この小論では、小説内の基準として John の存在に注目したい。ジョンは “the most important single character in the novel” (Firchow 26) と考えられるが、小説の結末で自殺する。自殺は人間の最も不幸な行為の一つであるが、ジョンの自殺の意味は何なのか。あるいは、ジョンの自殺は小説の構造とどのような関係を持つのかを考察し、その後小説の内容と関連する Huxley の *BNW* 執筆の意図やその結果についても概観したい。

I

物語はジョンの自殺という悲劇的な結末で終わるが、ジョンの自殺に関して二つの解釈が存在する。一つは the bnw の殺到する群衆がジョンを自殺に追いやったという解釈であり、この解釈は Keith M. May (116) や Sisirkumar Ghose (52) が述べている。もう一つはジョンの＜性の抑圧＞が結末の orgy で破綻した結果であるとする解釈であり、Peter Edgerly Firchow が何度も主張し (23,49,76)、Charles M. Holmes (88-89)、Kishor Gandhi (23)、Guinevera A. Nance (87) も同様の意見を述べている。

まず、第一の解釈であるジョンの自殺は群衆の殺到によるとする説であるが、小説の結末で、ジョンは the bnw の「西欧駐在総統」(26) の Mustapha Mond に島流しを拒否され、ただ1人廃墟の灯台に隠れ住み、文明に毒されない自然の生活をしようとする。しかし、楽しく生活している自分に罰を与えるため、生まれ故郷の「野蛮人保護地区」(35) の生活様式に従い、心身を清めるために芥子を飲み自身を鞭打つ。その鞭打ちを見物に多数の the bnw の住人が押し寄せてくる。Keith M. May が “These are bedlam scenes, for the obtuse cruelty of the spectators is brought to bear upon one who has become quite lunatic, and will shortly kill himself ‘while the balance of his mind is disturbed’.” (116) と述べているように、ジョンの自殺は、その群衆に精神的に追い詰められ、どこにも逃げ場がなくなった結果であり、安住の地のないジョンは、未来に希望を見出せず、孤独と絶望の中で自殺という手段しか残されていなかったという解釈である。

ジョンの自殺の引き金は殺到した群衆、言い換えればジョンは the bnw に敗北した、あるいは殺されたとする解釈は、BNW の構図に合致する単純明快なものであり、一見合理的に見える。² BNW の物語の構図は、結末の総統とジョンの論争に象徴されるように、the bnw 対ジョンという図式である。幸福だと条件付けられているが、その実個性が抹殺され、人間の尊厳が剥奪された the bnw と、不幸と苦悩を背負っているかもしれないが、自由な精神を堅持するジョンとの対立の構図である。そのジョンが the bnw に敗北する、あるいは殺されることにより、小説は the bnw の非人間性、個人の自由な生き方を阻害し、人間性を収奪する社会体制、を告発しているという解釈である。ジョンの自殺は the bnw のディストピア性を糾弾しているのである。

もう一つの可能性、＜性の抑圧＞の破綻、を考える場合に注目したいのは、小説の結末におけるジョンの自殺直前の文章である。この記述は、うっかりすれば見逃してしまいそのような数行であるが、ジョンの自殺直前の心理を把握するには唯一の重要な箇所である。

It was after midnight when the last of the helicopters took its flight. Stupefied by *soma*, and exhausted by a long-drawn frenzy of sensuality, the Savage (=John) lay

sleeping in the heather. The sun was already high when he awoke. He lay for a moment, blinking in owlish incomprehension at the light; then suddenly remembered — everything.

'Oh, my God, my God!' He covered his eyes with his hand. (212) () 内筆者

この文章では、ジョンの心理は決して直接には語られていない。語り手に暗示されているだけであり、ジョンの気持ちの推測は読み手に委ねられているが、「「おお、神様、神様！」彼は手で眼をおおった」という最後の文章からは激しい悔悟と苦悶の情がうかがえ、この錯乱が自殺に直結したと考えられる。しかし、重要なのは、それに先立って何を思い出したのかであり、思い出したのは前夜の出来事、「長時間の官能の狂乱」であったと考えられる。この「長時間の官能の狂乱」に関して、Peter Edgerly Firchow は次のように解釈している。

In the end, however, desire triumphs and the Savage and Lenina consummate their love in an orgy-porgian climax. When the Savage awakens to the memory of what has happened, he knows he cannot live with such defilement. (23)

更に、Chares M. Holmes は、フロイト (Sigmund Freud) 理論を援用して、ジョンの自殺を次のように解説している。

John has been cursed with an id-and -superego split, a war between ideals and the sexuality those ideals repress. Stimulated by Lenina to both romantic love and physical lust, his response is to purge his guilt in grotesque masochistic ways.... When swarms of visitors, and Lenina, arrive where he has been living alone, the brave new world has trapped him once and for all. His superego collapses in an orgy, and the only thing left for him is self-destruction. (88)

「長時間の官能の狂乱」の解釈の問題点は、端的に言えば、ジョンは性行為をしたのかどうか、ということにあるが、Firchow や Holmes の解釈が妥当ではないか。二人によれば、結末の orgy でジョンは Lenina Crowne と性行為をし、それを翌朝目覚め、前夜の出来事を思い出し、自殺したことになる。敷衍すれば、ジョンはソーマによって精神も肉体も緊張が一挙に弛緩し、the bnw の住人たちの orgy、乱痴気騒ぎに不可抗力的に巻き込まれ、性行為による「長時間の官能の狂乱」を経験し、その衝撃で自殺した、という解釈であ

る。

それでは、orgy に巻き込まれ性交をしたことが、何故自殺しなければならないほどの精神的なダメージをジョンに与えたのかという疑念が生じる。通常、性行為は人間の健全な営みであり、まして the bnw の住人にとっては、性行為はテニスをするのと同様の意味しか持たない。しかし、ジョンにとっては、性行為は自殺に追い込まれるほどの重大な意味を持っていたのである。

ジョンの性行為の忌避、いわゆる＜性の抑圧＞の原因は、ジョンの幼少年時代の家庭に遡る。ジョンは「野蛮人保護地区」の Malpais で生まれ成長したが、彼の母、Linda はマルベイスへ見学に来て偶然置き去りにされ、そこでジョンを出産した the bnw の女性で、the bnw の社会規範に従って近隣の男性と乱交を繰り返す。母の乱交に対するジョンの衝撃、怒りは、男の 1 人、Popé を憎み殺そうとした行為にも表出しているが、彼が 12 歳の時、手に入った Shakespeare 劇の台詞を使って表現されている。シェイクスピア劇の台詞は小説の題名にも使用されているが、³ シェイクスピア劇は人間の感情の振幅が大きく、人間の喜怒哀楽、愛憎などの人間の感情を赤裸々に最大限に表現しており、ジョンの激しい感情の描写に最適だと考えられたのであろう。次は、ジョンの怒り、嘆きを表す *Hamlet* (1600 頃) の台詞の一部である。

Nay, but to live

In the rank sweat of an enseamed bed,
Stew'd in corruption, honeying and making love
Over the nasty sty... (108)

母の乱交に悩み、怒るジョンの気持ちが、夫の死後まもなく夫の弟と再婚した母の不実を嘆くハムレットの心境に託して述べられており、ハムレットの心境がジョンの気持ちの鏡像になっている。(Baker 119)

母の乱交に対するジョンの気持ちを的確に表現するもう一つの言葉は「恥知らずの淫売」(160,161) という言葉である。これはレーニナが裸で彼に迫った時、彼が激怒して何度も浴びせた罵声であるが、the bnw の女性としてリンダとレーニナは二重写しになっており、この言葉は母親の行為に対するジョンの強い嫌悪感の表明である。

Robert S. Baker が “He prizes chastity because of his revulsion for his mother's promiscuity.” (139) と指摘しているように、⁴ ジョンは純潔を重視し、純潔の重視は「野蛮人保護地区」の結婚制度と密接に結び付き、ジョンにとって、性行為は結婚という形態の中にのみ存在するものとなる。このような性観念、結婚観を持つジョンは the bnw で

レーニナに出会い、好きになり、結婚しようとする。しかし、結婚制度がなく、乱交が社会規範となっている the bnw では、ジョンはレーニナと結婚できず、性を厳しく抑圧しなければならない。

ジョンのレーニナに対する愛を検証すると、ジョンがレーニナに対する愛と性の中で苦悩し葛藤していることがよくわかる。ジョンは最初マルペイスでレーニナに出会った時から、灯台での最後の出会いまで、彼女に対する性的欲望とその抑圧の連続であり、ジョンの心の葛藤を表出する出来事が段階的に繰り返し発生する。まず、ジョンはマルペイスの宿泊所でレーニナの寝姿に見惚れて以来、彼女を恋するようになる。が、その時すでに彼女のジッパーを引きおろしたい誘惑にかられるが自制する。また、the bnw ではジョンはレーニナを避けよそよそしい態度をとる。ジョンは自身の性衝動を強く自覚しており、性の対象から遠ざかろうとするのである。ジョンの拒絶反応が最高潮に達するのは、レーニナが裸でジョンに迫る時である。レーニナの魅力を帯びた挑発行為に、ジョンは彼女を「世界の何よりも愛している」(157) が、結婚するまではと自制し、彼女を乱暴に追い払う。最後に廃墟の灯台でのジョンの新生活で思い出されるのは、亡くなったリンダではなくレーニナであり、追い払っても追い払っても、抑圧されていた願望が再び意識の表面に現れる。ジョンは自身の性欲を抑えるのに必死であり、彼の精神だけでなく、「彼のたじろぐ肉体は逃れようもなく真に彼女を意識しており」(207)、ジョンは「墮落の化身」(212) のレーニナと「反逆する肉体」(212) である我が身を狂ったように鞭打つ。その夜ジョンはソーマによって緊張の糸がきれたかのように「長時間の官能の狂乱」(212) を体験し、Holmes が指摘するように、ジョンの超自我は orgy で崩壊し (88)、ジョンは自身に対する絶望と恥辱の中で自ら死を選んだのである。ジョンの自殺はジョンの生き方、信条、存在そのものに関わるものであり、ジョンの性行為は、彼の一番大事なもの、最も大切に守ってきたものを自ら破ったのであり、ジョンの存在意義を根底から揺さぶる行為となったのである。⁵

ジョンの自殺の引き金は＜群衆の殺到＞であるのか＜官能の狂乱＞であるのか、言い換えればジョンは the bnw に敗北したのか、あるいはジョンの自殺は＜性の抑圧＞の破綻の結果であるのか、二者択一を特定するのは難しい問題である。前者であれば、他者からの圧力という意味で外的要因、後者だとすれば、自殺はジョンの性格、生き方に起因するという意味で内的要因となる。どちらもジョンの生存を強く脅かすものであり、ジョンはいわば内憂外患の状態に陥っていたとすることができる。

二者択一は興味ある選択であるが、ここでは見方を変えて、どちらかを選択するのではなく、二つの要因と小説との関係を考えてみたい。外的要因はすでに検討したように、小説の構図はジョン対 the bnw であり、ジョンの自殺は the bnw のデストピア性を告発

していた。それでは、内的要因を採用すれば、小説との関係はどうなるのか。内的要因と小説との関係を検討したものは皆無なので、内的要因が小説の意味をどのように生成するかを以下に考察してみたい。

II

the bnw は、Henry Ford と Sigmund Freud の思想を土台に、フォードが安価な自動車の大量生産に成功した 1908 年を紀元元年に建国された国家であり、現在フォード紀元 632 年（西暦に直せば 2540 年）である。小説中 3 章で総統は the bnw について言及し、9 年戦争、経済大崩壊、世界統制、暴力による弾圧などの歴史を語りながら、“No wonder those poor pre-moderns were mad and wicked and miserable. Their world didn’t allow them to take things easily, didn’t allow them to be sane, virtuous, happy.” (33) と、それ以前、いわゆる旧世界、の人間は不幸であったと断言している。これは、勿論自己弁護であり、旧世界と対比しながら、自己の優越性を主張しているわけであるが、基本的には the bnw の存在理由、なぜ the bnw が建国されたのかを説明していると考えることができる。ここで重要な点は、旧世界は the bnw と対比して＜不幸な世界＞、＜よくなかった旧世界＞と主張されていることである。the bnw の前提として＜よくなかった旧世界＞の存在が想定される。

総統は＜よくなかった旧世界＞の不幸の要因として“family, monogamy, romance” (31)、あるいは“mother, monogamy, romance” (32) を挙げ、その理由として、愛情、衝動、精力などが家族、夫婦、恋人に排他的に集中し、激しい感情が生じるからである、と解説を加えているが、最も攻撃しているのは家族の弊害である。

Our Freud had been the first to reveal the appalling dangers of family life. The world was full of fathers — was therefore full of misery; full of mothers — therefore of every kind of perversion from sadism to chastity; full of brothers, sisters, uncles, aunts — full of madness and suicide. (30)

旧世界では、家族生活のため、悲惨、サディズム、純潔、狂気、自殺が充満していたのである。もう一つ総統が力説しているのは、人間が抱く欲望と充足との関係についてであり、次のように述べている。

Impulse arrested spills over, and the flood is feeling, the flood is passion, the flood is even madness.... Feeling lurks in that interval of time between desire and its

consummation. Shorten that interval, break down all those old unnecessary barriers.
(34-35)

人間は欲望が充足されないと、激しい感情となって現れ、時には狂気にさえなるのである。

C. S. Ferns は“tirade”であり、小説の弱点であると批判しているが (144)、総統のくよくなかった旧世界>の不幸に関する言説は、誰もその相関関係に注目していないが、ジョンの自殺に結び付く小説の中心的な箇所である。総統はくよくなかった旧世界>の不幸の要因として“family, monogamy, romance”を指摘しているが、この三つの要因がジョンの自殺の内的要因と密接に関係している。ジョンの自殺の内的要因はすでに考察したが、その内的要因に総統の言説を適用すれば、まず思い浮かぶのはジョンの家族である。ジョンはリンダが「野蛮人保護地区」に Tomakin と観光に来て、偶然置き去りにされ、そこでジョンを出産したのであり、本来生まれるはずがなかった白人青年である。リンダが母親で、「中央ロンドン人工孵化・条件反射教育センター」(1)の所長のトマキンが父親である。つまり、ジョンは登場人物中唯一家族が存在する。家族の悪影響を示すのはリンダである。リンダが the bnw の生活規範に従って「野蛮人保護地区」で近隣の男性と乱交をしたので、ジョンはその影響で結婚まではと性を抑圧し、レーニナとの愛と性の葛藤に疲れ果て、最後には性の抑圧が破綻して自殺したのである。母、リンダが「家族生活の恐ろしい危険性」を表象していると考えることができる。

第二の要因である monogamy もジョンの自殺では重要な役割を演じている。「野蛮人保護地区」で生育したジョンは、奇怪な迷信…キリスト教、トーテム信仰、祖先崇拜などと共に「結婚・家族」という生活規範を継承し (84-85) “nobody’s supposed to belong to more than one person”(100) という厳格な「一夫一妻制」を堅持している。ジョンは「野蛮人保護地区」では好きになった原住民の娘と結婚できなかったが、the bnw に来て、レーニナを好きになり、結婚しようとする。彼は、レーニナと初対面の時、レーニナについて、Bernard Marx に「あなたは彼女と結婚していますか」(115) と尋ね、そうでないと聞いて安堵したり、マルペイスでは「人は結婚」(157) し、「山のライオンの皮を女性の所に持ってゆく」(156) という結婚の習慣を語っている。しかしながら、結婚制度がなく、“every one belongs to every one else” (31) と乱交が生活規範となっている the bnw では、ジョンはレーニナを好いても結婚できず、かといって乱交にも参加できず、ジョンが希求している結婚による愛と性の統合はできない。ここでジョンは愛と性の内的葛藤状態、自縄自縛に陥り、出口を見出せないでいる。ジョンの願望は実現されないままであり、欲求不満だけが蓄積されていく。この欲求不満は総統の欲望充足論の正しさを証明し

ている。この性の抑圧は、レーニナが裸でジョンに迫った時のように、激しい感情となって表出し、充足されない性欲は増殖を繰り返し肥大化していき、最後には制御できなくなり、ジョンは自滅したのである。自滅したジョンとは対照的に、the bnw は人間の欲望を解放し、欲求即充足の社会であり、充足できない欲望は抱かないように条件付けられた社会である。

romance も family、monogamy と同様ジョンの自殺の要因となっている。romance は意味が分かりにくい面があるが、この場合は“romantic love” (Baker 93, Holmes 88) から推測できるように、好き・恋しているという意味であり、性が介在しないと考えられる。従って、性的欲望を意識しても抑圧し、結婚しなければ性欲は解消されない。ジョンとレーニナの愛と性に対する差異から判断すると、ロマンスを代表するジョンは<性のない愛>、レーニナは<愛のない性>とすることができる。

family、monogamy、romance は個々に論じたが、それぞれの要因は個々に独立しているのではなく、この三つは一つの連続する過程であり、人を好きになり、結婚し、子をなし、家族を作るのは<よくなかった旧世界>では、人生の自然な流れであり、人生の根幹を成す営みである。しかし、これらは人間関係を創造すると同時に破壊もするのであり、一歩間違えば、ジョンの場合のように、不幸の源になる。それ故、the bnw では、愛、結婚、家族は解体され、性の充足のみが奨励されている。

<よくなかった旧世界>の不幸の元凶となった family、monogamy、romance を再現するのはジョンであるが、旧世界の老病死を具現するのはジョンの母のリンダである。リンダは、ジョンと共に「野蛮人保護地区」から the bnw に戻ってからは、一日中ソーマ漬けで過ごし「急性老衰」(163)により44歳で死亡する。リンダの死の場面は the bnw の「死に対する条件反射教育」(166)と平行して叙述され、死に対する二つの対照的な態度が語られている。ジョンは、母との楽しい思い出や忌まわしい思い出を回想しながら、死の恐怖、死の悲しみ、母との永遠の悲しみにくれるが、一方その横で死が「最も悲惨な事柄」(170)であると考えないように、子供たちにチョコレートや飲み物を与えて「死に対する条件反射教育」が行われる。the bnw は老病死さえ克服し、60歳まで快適に生活し、人工的に生を終えるのである。

現在フォード紀元632年で<よくなかった旧世界>は消失して久しく、その痕跡は影も形もないが、the bnw でジョンとリンダは唯一人為的に時空を超えて、<よくなかった旧世界>を再現していると言することができる。言い換えれば、ジョンの自殺は、総統の言説のドラマ化であり、<よくなかった旧世界>の不幸の要因である family、monogamy、romance を材料に不幸を最悪の形でドラマ化したものである。

Peter Edgerly Firchow はジョンを“puzzling” (26) と形容しているが、the bnw とジョ

ンとは奇妙な関係にある。ジョンは the bnw に対する “critic” (Nance 76), “antagonist” (Baker 136), “warrior” (May 111) などと評されるが、この見解は、ジョンを the bnw の是非、つまり真に＜すばらしい＞のかどうかを検証する人物、更には the bnw のデイストピア性を告発し、その不当性を立証する人物であるとの解釈である。しかしながら、ジョンの解釈はもう一つ考えられる。ジョンの critic などとしての解釈は、the bnw を批判する立場からの見解であるが、見方を変え、逆の立場から、つまり the bnw の立場から見れば、ジョンの解釈は変わってくる。the bnw の視点から見れば、ジョンの生き方は愚かな、不幸の見本であり、自殺は自ら招いた最悪の結果である。この観点に立つと、the bnw はジョンのような不幸な人生を過ごさないように、ジョンの欠陥を根本的に是正した社会であり、ジョンは the bnw を正当化する装置である。BNW は、一方ではユートピアを構築しながら、他方ではユートピア構築の原因となった不幸な世界をジョンに具現させ、小説に説得性を持たせていると言える。ジョンは the bnw の不当性と正当性という相反する命題を証明する人物であり、ジョンは the bnw の不当性の立証を表の顔とすれば、裏の顔として the bnw の正当性を実証するという二面性を持っている。

III

the bnw は、ジョンの不幸をなくすため、人間が生殖の段階から壘で管理され、揺り籠から墓場まで快適な一生を計画・管理された社会であり、Henry Foster や Fanny Crowne は何も考えずに生活を享受している。

The world's stable now. People are happy; they get what they want, and they never want what they can't get. They're well off; they're safe; they're never ill; they're not afraid of death; they're blissfully ignorant of passion and old age; they're plagued with no mothers or fathers; they've got no wives, or children, or lovers to feel strongly about; they're so conditioned that they practically can't help behaving as they ought to behave. (180)

しかしながら、このユートピアを構成する前景化された道具立ては、一卵から 8～96 人もの同一の人間を製造できる Bokanovsky's Process、一例を挙げれば電気ショックで書物や花に対する「本能的」憎悪を植えつける (16) 条件反射教育、「いまでは全員が幸福です」を 12 年間、毎夜 150 回聞く (62) ような睡眠学習、性的には乱交、キリスト教とアルコールのすべての長所を含んでいるソーマ (45)、Alpha、Beta、Gamma、Delta、Epsilon というカースト制の身分制度、団体礼拝などであるが、そのままデイストピアを

形作ることになる。

このような道具立ての目指すところは“that is the secret of happiness and virtue — liking what you’ve *got* to do. All conditioning aims at that: making people like their unescapable social destiny.” (12) である。the bnw では、幸福とは、人々に隷属を愛するようにさせることを意味するのである。(xiv)

the bnw の人々は幸福に暮らしているが、その実態はテクノロジーを利用して組織的に計画・管理された全体主義的ユートピア社会であり、人々は、徹底的な管理・統制により自由が奪われ、「逃れられない運命」、言い換えれば「隷属」を無自覚に甘受するように条件付けられた社会である。この目的を達成するために、Stephen Jay Greenblatt が “Man, in using his reason to create the ultimate life of pleasure, has ceased to be man.” (97) と指摘しているように人間を改造し、人間自体を変えたのである。以前は神の領域と考えられていた人間そのものに、高度に発達したテクノロジーのメスが入ったのである。

the bnw のディストピア的側面を実証するのがバーナード、Helmholts Watson、レーニナの三人の登場人物である。バーナードは心理学者で睡眠教育の専門家であり、the bnw の中で唯一内部から体制に疑問を呈し、反対の声を上げる人物である。彼は「血液代用液中にアルコールが混入」(72) した結果、アルファの標準身長より 7 センチ低い。「肉体的欠陥は一種の意識過剰を生み」(57)、彼は劣等感と孤独に苛まれ、自意識に目覚め、「自分自身の独立した思考」(186) を持つようになり、“what would it be like if I could, if I were free — not enslaved by my conditioning” (75) と考える。しかしながら、バーナードの個人としての自意識のテーマは、BNW ではほとんど深まらない。

ヘルムホルツとレーニナはバーナードとは異なる問題を抱えている。二人は精神が囚われ、自由な思考ができない人間である。情緒工学大学、創作学部の講師でスローガンや睡眠教育用詩句を創作している天才のヘルムホルツは、詩作に目覚めるが、どのように自分の考えを表現してよいかわからない。最後は、詩作に適した風や嵐が多いフォークランド諸島に島流しを宣告され、喜んで従う。また、レーニナは 1 人の男性と長期間付き合っただけでいいという規則を破り、フォスターと 4 ヶ月間付き合っている、変人と評判のバーナードと付き合い、「野蛮人保護地区」に行く、あるいはジョンを好きになり裸で誘惑し手酷く拒否されるが、何故拒否されたのか理解できないなど、the bnw の社会から食み出し、人間としての覚醒の可能性が感じられるが、条件付けが障害となり、自由な人間として目覚めない。二人は、「精神操作の犠牲者は、自分が犠牲者であることがわからない」(*Brave New World Revisited* 154) 実例であり、特にレーニナは、「私は自由よ。とても素晴らしい時を過ごす自由があるわ。今では全員が幸せよ」(75) と述べていることから判断できるように、条件付けの犠牲者である。

なぜ *BNW* はユートピアとデイストピアという相反する評価を得るのだろうか。この疑問に関係するのは、Huxley の *BNW* 執筆時の意図である。Huxley は、*Letters of Aldous Huxley* で、執筆の動機を次のように述べている。

I am writing a novel about the future [*BNW*] — on the horror of the Wellsian Utopia and a revolt against it. Very difficult. I have hardly enough imagination to deal with such a subject. But it is none the less interesting work. (348)

Huxley の意図は、H. G. Wells の *Men Like Gods* (1923) (Firchow 58) などにおける科学の進歩に対する楽観的な考えに反発し、人間生活における科学技術の応用の恐ろしい結果を示すことであった。言い換えれば、Huxley が描こうとしたのは、ユートピアの夢ではなく、テクノロジーを応用したユートピアの悪夢とも言うべきものであり、*BNW* はこの難解な構想が見事に結実した小説である。

Huxley は *BNW* をどのように評価したのだろうか。小説内では結末の総統とジョンの論争が示すように、明確な判断を控えているが、Huxley は、巻頭言で Nicolas Berdiaeff (1874-1948) の言葉を引用して、彼自身の考えを表明している。Huxley は、ユートピアは実現可能であるが、「ユートピアの決定的な実現をいかにして避けるべきか」(v) という問題を提起しているように、*BNW* はユートピア実現により発生する悪夢を描いた小説である。

BNW の中にユートピアとデイストピアという相反するものが並存している。ユートピアとデイストピアは光と陰、表と裏のように共存しているのであり、この二つはメビウスの帯 (Möbius strip) のようにつながっている。つまり、ユートピアを辿っていると、いつのまにかデイストピアになり、また不思議なことにユートピアに戻るなのであり、ある断面を切ればユートピアの夢が語られ、別の断面を切ればデイストピアの悪夢が展開するのである。このように *BNW* は二極の相容れない二つの意味を内包しており、どちらかの意味に帰着できないのである。

注

- 1 印刷間違いか、原文では *distopia* となっている。
- 2 デイストピア小説を考察している Chad Walsh は “*BNW* conquers. He hangs himself.” (96) と述べている。
- 3 題名は *The Tempest* (1611) の Miranda の台詞からとっている。また、ジョンの気

持ちの表現にしばしばシェイクスピア劇の台詞が使用されている。

- 4 Robert S. Baker はリンダの乱交とジョンの純潔の重視との因果関係について詳しく検討している (116-141)。
- 5 20 世紀前半＜性の抑圧＞と言えば Sigmund Freud であり、Robert S. Baker が “the Savage’s autobiography is a Freudian case study of childhood neurosis” (108) と述べているように、ジョンの人物創造はフロイトの影響が大きい。

主要参考文献

- Baker, Robert S. *Brave New World: History, Science, and Dystopia*. Boston: Twayne Publishers, 1990.
- Bowering, Peter. *Aldous Huxley: a Study of the Major Novels*. London: The Athlone Press, 1968.
- Ferns, Christopher S. *Aldous Huxley: Novelist*. London: The Athlone Press, 1980.
- Firchow, Peter Edgerly. *The End of Utopia: A Study of Aldous Huxley’s Brave New World*. Lewisburg: Bucknell University Press, 1984.
- Gandhi, Kishor. *Aldous Huxley: The Search for Perennial Religion*. New Delhi: Arnold-Heinemann, 1980.
- Ghose, Sisirkumar. *Aldous Huxley: A Cynical Salvationist*. Bombay: Asia Publishing House, 1962.
- Greenblatt, Stephen Jay. *Three Modern Satirists: Waugh, Orwell, and Huxley*. New Haven: Yale University Press, 1965.
- Holmes, Charles M. *Aldous Huxley and the Way to Reality*. Bloomington: Indiana University Press, 1970.
- Huxley, Aldous. *Brave New World*. London: Chatto & Windus, 1967.
- *Brave New World Revisited*. London: Chatto&Windus, 1974.
- May, Keith M. *Aldous Huxley*. London: Elek, 1972.
- Meckier, Jerome. *Aldous Huxley: Satire and Structure*. London: Chatto & Windus, 1969.
- Nance, Guinevera A. *Aldous Huxley*. New York: Continuum, 1988.
- Smith, Grover. *Letters of Aldous Huxley*. London: Chatto & Windus, 1969.
- Walsh, Chad. *From Utopia to Nightmare*. London: Geoffrey Bles, 1962.
- Watts, Harold H. *Aldous Huxley*. New York: Twayne Publishers, 1969.
- 川端香男里『ユートピアの幻想』（講談社学術文庫）講談社、1993 年